

ブラウン環礁 (平成4年3月5日、新保 晃氏撮影)



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者慰霊会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 振替口座東京0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗二

平成四年度

慰霊祭 総会

富田 ミツ

平成四年三月二十九日(日)今年の慰霊祭・総会が開催されました。春休み中なので家族連れで参加された方も多く、一九六名の出席となりました。

朝から小雨が降り、社頭の桜は八分咲き位でした。役員の方々はテントの中で大忙しでしたが、受付をすませて靖国神社参集所に八時四十分に着きました。遺族会の知り合いの方方とお会いできて、お互いに元気で再会できたことを喜び合いました。

十時、定刻通りに拜殿で修祓をうけ、御本殿に昇り献饌、祭主祝詞奏上、玉串奉奠、佐藤会長の祭文奏上に続いて、会長、大給湛子さん、内海静枝さん、川副克己さん、米田豊治さん、和田恵津子さん、馬場千草さん(十五才)高橋健志さん(十二才)の八名が代表として玉串を奉奠して、参加者一同は亡き肉親への黙禱を捧げて慰霊祭は終了しました。本殿より退下して御神酒と神饌を戴いて、総会々場の靖国会館に移りました。

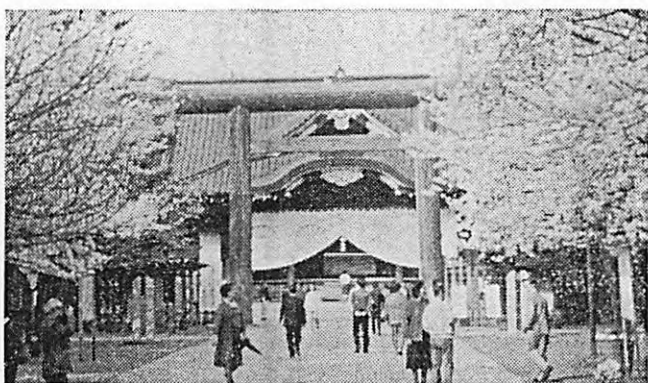
第二十九回定期総会が十一時から開会され、昼間常任幹事が議長になって議事をすすめた。会長の挨拶の後、引き続き会務報告があり、秋本常任幹事が一月で退任されたこと、柴崎監事が今期でお辞めになるなど、本会にとりましては大変重要な方々に去られることは、誠に残念なことでした。

続いて平成三年度会計決算報告(別掲) 監査報告、平成四年度会務計画案、平成四年度予算案(別掲)等、それぞれ担当者より説明があり、異議なく拍手をもって承認されて総会は無事に終わりました。

雨のために今年も記念写真は中止になり残念でした。

目
次

慰霊祭 総会 直会	富田 ミツ	1
和歌三首	谷沢 英子	2
五十年祭を盛大に!		3
マーシャル諸島慰霊巡拝		4
行動概要 参加者		5
慰霊巡拝に参加して		5
新保 晃 池田 淑子		
谷 達也 中村 順子		
峯 木作 長塚 隆夫		
ブラウン環礁の玉碑(7)		
..... 矢野 雄三		9
父の戦歿地を訪ねて		
..... 石川 勲		13
佐世保・釜墓地の戦後なき英霊		
..... 内海 淑子		13
国民自重の精神(1)		
..... 小泉 信三		14
杳き雲の下で(2): 平林 和夫		15
名簿訂正		16
クエゼリン・エビゼ座談会		17
慰霊祭参列者芳名		18
寄付者芳名		19
靖国神社の宮司交替		20
会員のみなさまへ		
..... 峰岸 睦子		20
本部だより		20



直会旅行会

靖国神社北口から四十五名がバスに乗り、お弁当やお茶が配られ、十二時三十分に出発しました。ガイドさんの説明で、靖国神社の桜が千八百本もあることをはじめて知りました。横浜のマリンタワーは公式灯台で、四十七呎も光が届くなどと聞きながら、横須賀の記念艦三笠に到着、まず日本海海戦の映画を見せて頂き、係員の要領を得た上手な説明を聞き乍ら約一時間艦内見学をしました。

前号の「環礁」にのつていた記念艦三笠に係わりの深い記事も思い出され

日露戦争と日本海海戦の意義について感慨を新たにしました。もしも日本海海戦に日本が勝っていなかったらその後の日本はどうなっていたのでしょうか。日本という国はなくなっていたかも知れません。少なくとも今の日本とは違った姿になっていたのではないかと思います。

油壺観光ホテルに到着したのは、五時少し前でした。部屋から海の眺めは良いのですが、雨はまだ降り続いていました。現地墓参に行かれた方達は、写真の交換などをいたしました。

六時から宴会が始まり、会長の御挨拶があり、例年お元気で出席されていた新潟の青木さんが、直会申込みの後で亡くなられた事を知り、一同驚きつつ皆で御冥福を祈りました。

宴たけなわとなりますと、カラオケの順番を待つ方もあり、今年は女性軍も大張り切りでした。八時過ぎにお開きとなり各部屋に戻り、明日の観光を期待しながら眠りにつきました。

三十日、目をさましますと雨も上っていて、ホッと致しました。

七時四十分朝食、九時に出発、まず源氏の氏神を祭る鎌倉八幡宮にお詣りして記念写真を撮り、次の長谷寺の大観音は九米余りもあり、木造では日本一と言われているそうです。ついで鎌倉の大仏様と親しまれている高徳院の青銅造りの阿弥陀如来を拝みました。高さは十三米もあり、奈良の東大

寺につぐ日本第二の大きさで、かつては大仏殿があったけれど、津波でこわれて露座のままとのことで少しうづむき加減の円満で美しく、端正な厳しさを備えたお顔を見ていると、心が安らぎ「みほとけなれど、美男におわす」とはよくも云い得たと思えました。

次に日本三弁天の一つとして名高い江の島弁天様をお詣りしました。

昼食は江の島の「貝作」で、新鮮な魚料理に満足して、十四時四十分帰途に着きました。会長の奥様からみかんを頂いたり、下田の土屋さんから海草の佃煮のお土産、又会友で鶴沼に転居された十二徳次さんから、紅茶やレモンティの差入があり感謝しました。

帰路は湘南海岸を通り、名所旧跡の説明を聞きながら、若き日の物語を思

い出したひと時でした。

会長から直会旅行を、来年も続けるか？どうか？の賛否を問われましたが、全員が是非続けて欲しいと言う希望でした。会長から今年は五十名の申し込みがあったが、五名が取り止めになったこと、又直会旅行の場所については、私案として所要時間が許されるならば、愛知県の三ヶ根山あたりはどうかと思っているが、会員の方々の良案があれば申し出て欲しいと言われました。

東京に入るまではスムーズにバスも走り、「あの椰子の島」や「靖国神社の歌」「城ヶ島の雨」「七里ヶ浜」など、若き時代を想い出しながら歌っているうちに、藤沢で六名、目黒で三名の方が下車され、十七時三十分東京駅に到着し、それぞれ来年の再会を約してお別れしました。

年一回の集りも、あつと言う間に終りましたが、無事に終了しましたことは、会長始め役員の方々の御尽力によるものと、深く感謝申し上げます。

谷 沢 英 子

踏みしめる玉砂利の音聞きながら

雨の参道一人急ぎぬ

英霊の鎮り給う本殿に御霊拝む拍手の

牙ゆ

丈夫の声無き声を心して永久に護らん
靖国の宮



鎌倉八幡宮

五十年祭を盛大に!

憶えていらっしゃいますか? あの日の感激を、肉親が、何時、何所でどのようにして戦死したかを全く知らされなかつた遺族八百余名が初めて事の真相を聞き、同じ境遇の仲間が沢山いたことをお互いに確かめたのは、昭和三十九年二月六日の、二十年祭の時でした。

私共のこの会は、昭和三十八年六月に、クエゼリン島戦歿者遺族会として結成され、その後、ルオット、ブラウン、ウオッセ、マロエラップ、ヤルトリ、タラワ、マキン等の遺族も順次参加され、クエゼリン本島に忠魂慰霊碑を建立するに至つたのは昭和四十三年でした。

度々の現地慰霊、例年の慰霊祭、ささやか乍ら会報の発行等の活動を続けておりますが年を経る毎に会員の老齢化、漸減が目立ってきました。

あの不幸な日からやがて五十年になります。皆様の御家庭ではそれぞれの慣習によって御命日のおまつりをされることでしょうか、本会は、去る五月三十一日の役員会で、平成六年の定例慰霊祭の日に五十年祭を斎行することといたしました。

会員皆様の御意見、御希望をもとにして企画したいと思いますので、御提案下さいませようお願いいたします。

第28期決算報告書 (自平成3年1月1日 至平成3年12月31日)

第29期一般会計予算

マーシャル方面遺族会

(自平成4年1月1日 至平成4年12月31日)

1 一般会計収支計算書

2 一般会計財産目録 (平成3年12月31日現在)

<収入の部>

科目	金額
前期より繰越	5,178,932
会費	1,549,000
寄付金等	1,701,380
受取利息	644,959
雑収入	18,500
(小計)	(3,913,839)
合計	9,092,771

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	41,600		
普通預金	154,832		
郵便振替	360,770		
金銭信託	1,333,678		
定期預金	2,000,000		
国債	1,500,000		
		次期へ繰越	5,390,880
合計	5,390,880	合計	5,390,880

<収入の部>

科目	金額
前期より繰越	5,390,880
会費	1,200,000
寄付金等	1,500,000
受取利息	600,000
雑収入	15,000
(小計)	(3,315,000)
合計	8,705,880

<支出の部>

科目	金額
慰霊費	309,721
運営費	603,675
広報費	746,522
印刷費	18,432
刊行費	1,637,564
通信費	184,288
消耗品費	13,252
会議費	21,305
送金諸費	39,828
公租公課	127,304
(小計)	(3,701,891)
次期へ繰越	5,390,880
合計	9,092,771

3 特別会計 (現地慰霊碑維持基金勘定)

収入の部		支出の部	
前期より繰越	7,500,000		
		次期へ繰越	7,500,000
合計	7,500,000	合計	7,500,000

(注) 定期貯金並びに貸付信託として保管

平成4年3月12日

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

監事 高橋 鎮 夫 ㊟
柴 崎 晃 ㊟

マーシャル方面遺族会
会長 佐藤 宗 丕 ㊟

<支出の部>

科目	金額
慰霊費	500,000
運営費	700,000
広報費	800,000
通信費	200,000
会議費	150,000
印刷費	50,000
消耗品費	30,000
公租公課	120,000
雑費	20,000
送金諸費	50,000
(小計)	(2,620,000)
次期へ繰越	6,085,880
合計	8,705,880

厚生省主催

マーシャル諸島慰霊巡拝

Ⅱ ブラウン、クエゼリン、ルオット Ⅱ

平成 3 年度厚生省主催の現地慰霊巡拝は、遺族 32 名が参加し、全員その目的を果たし無事帰国しました。その概要を御報告いたします。(高橋鎮夫)

行 動 概 要

2 月 29 日 (土) 午後 2 時九段会館にて結団式を行い、援護局庶務課長及び本田派遣団長の挨拶があり、その後、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼、休憩中に希望者は靖国神社に参拝し、一路成田空港に向い一泊する。

3 月 1 日 (日) 午前 10 時 15 分コンチネンタル航空にて成田発、サイパン経由午後 3 時 25 分 (現地時間) グラム空港に到着、時間に余裕があってバスにて恋人岬、スペイン広場などを見学して一泊。(グラムまで約二五〇〇 km 差東京 + 1 時間)

3 月 2 日 (月) 午前 9 時 30 分グラム空港発、ボンベイ、コストラニ、クエゼリンを経由して、17 時 50 分 (現地時間) マジューロ着。約 7 時間の旅に団員はかなり疲れた。1 班はロバート・レイマースホテル、2 班はローヤル・ガードンホテルに入った。(グラムマジューロ間は約三二〇〇 km

時差東京 + 3 時間)

雨不足が続いたそうので、給水は朝夕各 2 時間と制限された。夕食はこの日から 5 日間、日本人山口氏経営の食堂でとる。米飯、味噌汁、漬物などがある難かった。

3 月 3 日 (火) マジューロ島内一巡見学。午前 10 時より、山村さんほかの方の御案内で、約半日かけて見学する。円く見える水平線と、ローラ岬の遠浅の白砂の美しさは印象的で、取りたての椰子の実は果汁を御馳走になった。

3 月 4 日 (水) マーシャル政府所有の船で 9 時 30 分出港。マジューロ環礁内の沖合いで洋上慰霊を行う。厚生大臣からの花輪、供物及び団員それぞれ供物を捧げて冥福を祈る。式後花輪、供物などを各々青い海上に投げて合掌した。

3 月 5 日 (木) 1 班はブラウンの遺族 11 名と、厚生省鯨井事務官、日通旅行杉本添乗員を加えた 13 名は、10 時 10 分マジューロ発、11 時 35 分クエゼリン着、12 時 25 分クエゼリンを発って、一路ブラウンに向った。眼下に点在する美しい珊瑚礁に見とれながらも、思うは只ブラウンのみ。

洋上慰霊



父が、夫が、兄弟が玉砕したのはどんな島だろうか。クエゼリンからの行程約 2 時間、突如視界に入ってきた待望の島を、一同脳裏に焼き付けるように見入って声も無い。14 時 20 分着陸すると、待ち受けていた二台の小型トラックは、我々を乗せて北に向った。走る

こと約 10 分、島の北端で下車した我々は、海浜の繁みを風除けにして祭壇を設けることにした。厚生大臣や遺族会長の花輪の外、各人持参の品物を供え、漸く祭壇らしき体裁が整った頃には、灼熱膚を焦がして喉はからからだ。炎天下無念の玉砕を遂げた将兵の辛苦に想いを馳せ、心からその冥福を祈った。

滞島時間 2 時間では、島内を歩き、島民と話す余裕も無く、飛行機は無情にも 16 時 15 分ブラウンを後にした。ピキニに寄港し、クエゼリンで 2 班と合

流して、マジューロに帰着したのは 20 時 50 分であった。

2 班は 10 時 15 分マジューロ発、11 時 30 分クエゼリン着、12 時ルオットへ。(所要時間約 30 分) 直ちにバスで墓苑にかけつけて、厚生省、遺族会各団員の花輪、供物を捧げ冥福を祈る。

その後、島内の戦跡を巡歴する、整地された芝生の中に砲台の跡、司令部跡(?)があり、草むらの奥にあった野戦病院跡などに涙をさそわれる。

午後 3 時 30 分ルオット発、4 時クエゼリン着、墓苑に直行。慰霊碑に、ルオットと同様に生花、花輪、供物を捧げて御冥福を祈る。軍の副司令官カーネル・ジャクソン氏、徳原勇氏、アキ・ホールさん、ヒデコ・ラポイントさんの心のこもった接待を受けた。ほうじ茶が身にしみる。

その後島内を巡歴した。米軍が最初に確保したというトーチカ(砦)が白い柵で囲まれて痛ましく、外洋に面した海辺に立って、百八十度以上広がる水平線まで、小島も見えず、船、海鳥も見えず、無人の海に向って、ただ無言で見つめるだけだった。こんな悲しみがあるうか!

午後 7 時 30 分クエゼリン発、マジューロに 8 時 50 分着。

3 月 6 日 (金) 午前 9 時 30 分から、東太平洋戦没者の碑の前で、合同追悼式、厚生大臣の花輪のほか、各県知事など沢山の花輪、供物に囲まれた碑の

前で、本田団長、遺族代表中山きわさんの追悼の辞があり、マーシャル諸島並びに、その周辺海域で戦没された英霊の御冥福を祈った。これで今回の慰霊巡拝の行事はすべて終了した。夕食時に現地の民族踊りを観賞する。

3月7日(土)午前11時マジユロを発ち帰国の途につく、クエゼリン、コストラニ、ボンベイ、トラックを経由して午後4時35分グアムに着き、一泊した。

3月8日(日)午前3時に起床して、午前6時グアム発で成田へ直行、同着は8時25分、税関通過ののち解団式を行い、又の再会を約して解散した。2月29日から3月8日まで8泊9日



ブラウン島

間、高齢者の参加が多かったのに拘らず、一つの事故もなく帰国出来たのは、主催された厚生省、特に本田団長や鯨井事務官の細やかな気くばりと、労を惜しまない手助け、日通旅行添乗員諸氏のお心遣い、そして団員各位の協力と励ましがあってのことであり、あらためて感謝申し上げる次第です。

なお、クエゼリンのラポイントさんから、お友達が海底から拾ってきた戦没者の遺品を寄贈されました。厚生省で調査して下さいます。

参加者名簿 (敬称略)

- 第1班(ブラウン)
 - 班長 鯨井佳則 (厚生省)
 - 保田栄子 富田キミ 中村順子 青木利一 荒木常子 遠藤安男 谷 義雄 谷 達也 新保 晃 池田淑子 齊藤泰一 杉本添乗員 13名
 - 第2班(クエゼリン・ルオット他)
 - 班長 本田機先 (厚生省)
 - 上原常二 上原健剛 大坂幸治 本波博 峯 木作 吉田洋一 大黒武雄 高橋鎮夫 加藤 照 布川慶一 佐竹エス 山森久江 鈴木勇三 長塚隆夫 中山きわ 田賀将一 田賀朋子 柚村 栄 望月靖久 瀬戸隆子 木村二三夫 石鳥添乗員 23名 合計36名
- 尚、参加者の内訳は、妻3、兄弟妹23長男長女6で60才以上の方が27名 (本稿中1班の行動は同班の谷 達也さんに書いて頂きました)

慰霊巡拝に参加して

参加された皆様から報告、感想、礼状など沢山頂きましたが紙面の都合で載せられないもの、又は一部を割愛させて頂いたものもありますが御了承ください。

(ブラウン) 新保 晃 (事務局)

へ傾いた椰子の木は殆ど見当りません。戦時中密集していた椰子の木は戦火で大部分倒され、その残りが生えていると当時の方々に聞いておりました。それが今見ると更に変貌しているわけです。

三月五日いよいよ今日は待ちに待ったブラウン訪島です。私共を乗せてエヤーマーシャル機は予定より約3時間おくれてマジユロを出発しました。途中クエゼリンに立ち寄り約2時間、そろそろ見えるはずと窓下の海を眺めておりました。果して右前方遠く白波打つリーフの細長い島が見えてきました。ブラウン環礁です。ブラウン本島との間に小島を置いて遠くメリレン島が見えます。夢中でカメラのシャッターを押します。とうとう来ました。長い間待っていてくれたなあ弟よ、と念じました。上空からのブラウン環礁は全く初めてです。たちまち島影は大きくなり機は本島北部を横切り礁湖内へ入り南下、南水道の反対側イグレ島を見て反転し本島滑走路へ入りました。タラップを下りて先ず目に入ったのは、「ウエルカム・トゥ・ユニウエトク」の立札と多数の原住民達、更に栽培植樹したと思われる背の低い密集した樹木です。13年前に見た全島を通しての背の高い5mほどのまばらの、西

私は13年前の昭和54年政府派遣遺骨調査団に参加し、米軍管理中の制約から船でトラック島から訪ねました。初めて島を見たときの感激は今も忘れません。未明まだ真暗の中ブラウン本島の灯火点在するを見て、やっと着いたとただ感動のみ。南水道から礁湖へ進入ブラウン本島中ほど沖合2kmに停泊、空が明るくなるにつれ旭光をバックにまばらの椰子の木や建物のシルエツトがクッキリ見え、低い長細い外海が島を越えて見えるほどちっぽけな島で、ただ驚くばかりでした。上陸は代表者のみに限定され私共は船上待機で約7時間ののち発進、メリレン島北側から東水道を外海へ出、遠くエンチャビ島を眺めて西へ迂回し、ブラウン環礁を離脱しました。従って私共は目の前に島を見ながら上陸出来ず、残念至極是非この次はと念じたものでした。しかし昭和60年日本遺族会巡拝団には、都合悪く参加出来ずあきらめましたが、今回それが実現できたわけでした。

さて私共は2台の軽トラックに分乗して島を縦走する内海寄りの道路をノンストップで北上、最北端に設けた祭

壇によって追悼式が行われました。丁度この頃(午後3時頃)日差しが強くと思われます。団員それぞれ亡き方々のご冥福を祈りました。私は直ぐ目前の小島の左側遠く見えるメリレン島に向っても同様に祈りました。弟は多分メリレン島で戦死のはずです。

しかし、確定できるのは何時になるのか、或は永久にその時は来ないかも知れません。

考えるとこの環礁で戦死された方々は誠に不運であった、戦死しても、これはまだつきまといると考えざるを得ません。戦後の核実験による破壊とその後の整理、クリーン・アップなどで戦争中の残されたものは一切何れかに除去られ跡形もなくなっている。エンチャビ島はほぼ永久に立入り不能か、メリレン、ブラウン本島は将来は滞在出来るかも知れないが、戦没者の残されたものは何もないであろう。しかしそれでも遺族としては少しでも何か手がかりが掴めないか、将来に期待すること切なるものがあります。

今回ブラウン本島に滞在した時間はほぼ二時間でした。もっと滞在していたいと思いましたが。しかしこの訪島の実現についての関係の方々の御努力を考えると誠に有難うございました。改めて御礼申上げる次第です。

(注) 13年前昭和54年当時と現在との間に変わらないで残って居ったものは、今回

島内詳細に見たわけではありませんが、つぎの二点と考えます。

- 一、北端の上陸用棧橋
- 二、滑走路南端内海側の半円状の構築物(旧日本軍の弾薬庫か、戦後ミサイル実験の弾着観測所か、或は退避所か)

(ブラウン) 池田 淑子

平成四年三月、私にとりまして終生忘れることの出来ない現地慰霊に、参加させて頂く幸運を得ました。特にエニウエトク島は、戦後初めて政府主催による集団慰霊で、私達以上に英霊のお喜びも察せられ、逸る心をおさえつつ機上の人となりました。この日を何より切望していた母は、健康上断念せざるをえず、母の気持ちを受けて、又今回参加出来なかった多くの御遺族の方に代ってお詣りするべく気をひきしめて旅立ちました。

マジュロから双発機で約四時間、洋々と果てしない紺碧の海を飛ぶ。視界良好、点在する環礁が美しい。やがてエニウエトク着陸体勢を告げるアナウンスで、眼下をみると、小さな島が見えてきました。緑の中に線をひいたように白く長く伸びているのは滑走路でしょうか、島を囲む波の白さと海の色が、形容しがたい程美しい、本当に父達がこの島で戦ったのでしょうか?信じられない。二時三十分いよいよ到着。もう胸が一杯になり、こみあげて

くるのをグツと押えるように唾をのみ込みました。

日に焼けた現地の人達や子供達が大勢見物(歓迎?)に来ています。「お父さんついに来ましたよ、幾度となく口にしてきたこのブラウン島へ、はるけくも来ました」現地の方の御好意で用意されたトラックの荷台にのり、兵隊さんが上陸されたという地点へ向う。左右にくまなく目を凝らす。四十八年もの歳月を経た今、往時を知るよすがはない。

(もともとブラウン島は、原水爆の突撃場であった為、入城は許されず、アメリカ占領軍により戦場掃除が行われ近年ようやく入島許可がおりたとの事です)

細く続く道端には椰子が林立しており、黒い豚があちこちに悠長に草を食んでいました。約十分程で上陸された地点へ到着、早速厚生省の方と御一緒に近くの台地に祭壇を設け、靖国神社の御神酒や故郷から持参したお水、好物等々、銘々お供えし、お線香、ろうそくを手向け一同黙禱を捧げ御冥福をお祈り致しました。

お父さん……皆さん……やっときました。遅くなってすみません……と涙ながらに詫びつつ四十八年の越し方を御報告、語りはつきません。あつという間に制限された時間がきました。夢中でカメラのシャッターを押した後髪ひかれる思いで後片づけをしました。父も踏

んだであろう足跡の残る砂を一握りと、父もみつめたであろう青い海、はるかにかすむメリレン島や、父の終焉の地と聞いているエンチャビ島の方向をみつめ険に焼きつきました、父の辞世の句

たちねの 父母在ます國

おろがみて

心静けく決意 告げなむ

この近辺でいよいよ自分の最後を予期し家族に詠んだ心情を思う時、如何ばかりだったかと胸が痛みます。四時十五分、機はゆっくり離陸しました。お父さん、皆さん又来ます。それ迄待っていて下さい。そして島民の皆さんその温情でいつまでも島をお守り下さい」とつぶやきました。

今回、恙無く目的が果たされました事は英霊の御加護はもとより、厚生省の本田団長をはじめ、日通旅行の方々、そして佐藤会長長の御尽力と関係各位のお蔭と厚く御礼申し上げます。又御同行の各都道府県の方々の皆様とも良いめぐり逢いが出来感謝しております。一人でも多くこの機会を得られますよう後世に伝えていきたいと思っております。ありがとうございます。

(ブラウン) 谷 達也

七年前の昭和六十年三月十六日、日本遺族会の慰霊団に参加した私達遺族五人は、始めてブラウンの地を踏んだ。

その時はチャーター機の故障で、予定日を九日も遅れたが、今回はそういうこともなかった。七年前は生気なくしおたれた椰子の疎林を見て、何と殺風景な島かと索漠たる思いがしたが、今回はそれらの椰子も緑濃く生長し、漸く南国の島らしい姿を整えつつあった。前回は着陸地点の近くに横たわっていた赤錆びた石油タンクの残骸らしきものを風よけにして祭壇を設けたが、今回は待受けていた二台の小型トラックに分乗して一路北方に向った。島の中央あたり、前回そこからモーターボートでメリレンに向った棧橋は跡かたもなく、舟の姿もなかった。トラックの着いた島の北端は美しい砂浜であった。

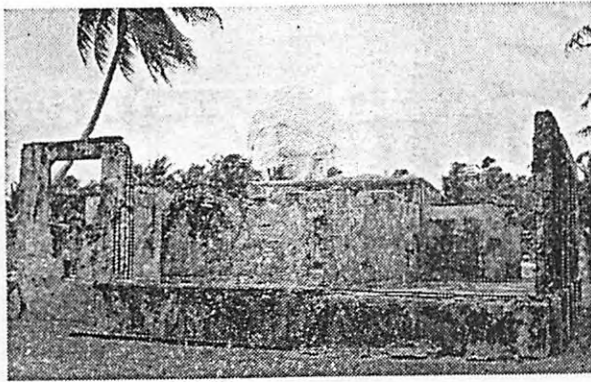
風を防ぐ灌木の繁みを見付けて祭壇を設けたが、此処は北方にメリレンが望見出来る絶好の場所だった。遠いエンチャビが見えないのは残念だったが、日の丸の旗の下に厚生大臣の花輪を始め、各人持参の花や供物を並べ、此の島を始めエンチャビやメリレンで散華した英霊の冥福を祈って黙禱を捧げた。遺族十人の胸中に去来した思いは何であつたらうか。平坦な珊瑚礁の此の小さな島で、八百人を超す軍人軍属が、海からは艦砲射撃の標的となり、空からは飛行機の銃爆撃に身をさらし、灼熱の下で飲み水はあつたのか、食べ物はどうしたのか。北満で鍛えられたその腕を試す術もなく、上陸

した米軍の前に虚しく玉砕せざるを得なかった無念の思いは如何ばかりであつたらうか。丁度その頃、ビルマの戦場にいた私は気にかかる夢を見た。なだらかな丘の彼方から足早やに弟がやって来る。北満にいる筈なのに服装は夏姿だ。駆け寄ると弟は「急いで帰らねば」と、今来た方向に消えて行つた。

昭和二十一年六月、私は復員して始めて弟の戦死を知った。

(フラウン) 中村 順子

こんな遠いところまで…… どうし



ルオット島の総司令部跡と

巨大なハラボランテナ

て？ 何のために？ 兵隊さんの動きが一目でわかる程のこんな小さな島。それはまるで、逃げまどっている兵隊さんを撃ち殺すテレビゲームでもしているかの様で敵陣がさぞ満足したのではないかと思うと無性に腹が立つた。

ひどい、ひどすぎる。可哀想な父達。着陸した時、過去に何事もなかったかの様に島民達が集って来ていた。四十八年前の事を遺族達は、今なお忘れられずにいるという事実と、こん日の平和が続くよう心から願っている。

(クエゼリン) 峯 木作

一、兄の兵役

氏名 峯 林平 (みね りんぺい)

入隊 札幌第25聯隊 17・1・10

転属 札幌→満州 17・4・頃

満州→南方 18・12・頃

戦死 クエゼリン島 19・2・6

二、兄の思い出

①兄は子供の頃、姉3人、妹1人に挟まれた唯一人の男の子(その後弟3人、妹2人が生まれた)として両親の寵愛を一身に受けて育った。

②今考えてみると短命だった兄への両親からの愛情は、倍、いやそれ以上に濃縮されたものだった。

③18才のとき国鉄マンになった。逞しい身体の持主であり、文字が上手で文武両道に長けた評判の好青年だった。

④入隊後、教育期間中(札幌時代)の兄に面会に行ったことがある。粟々しい軍服姿は結構似合っていたが、瘦せて目玉だけがギョギョと光っていたのが印象深い。

母の手製のポタ餅をガキついて食べる兄を見て、当時14才の私は大人びていた兄が子供のしぐさをしているように見えて寂しい気がした。

面会の別れ際、母は周囲をはばかりながらそっと兄に耳打ちした。『元気で帰ってくるんだよ』兄はゆっくりと頷いた。頷いた兄の心境は聞かずともわかるように思えたが重苦しさがいっぱいだった。この時の別れが兄との最期になろうとは……。

⑤兄や両親の位牌を受継いでいる私は、来年2月6日兄の50回忌法要を営む予定でいる。

平和な時代の中で50回忌を迎えるに当り、できるならば兄林平さん最期の地に私のこの足で立ち、永い年月、語り伝えたくともかなえられなかった数々の事柄を現地慰霊巡拝のとき一節申し上げたい。と念願するに至った。

三、現地慰霊巡拝

①日程(省略)

②洋上慰霊巡拝

マーシャル政府所有の船にて海上より慰霊巡拝。船上に仮祭壇が設けられ全員で黙禱を捧げる。私は日本から持参した兄のお戒名・供物・写真などを祭壇に上げて心からなるお焼香をす

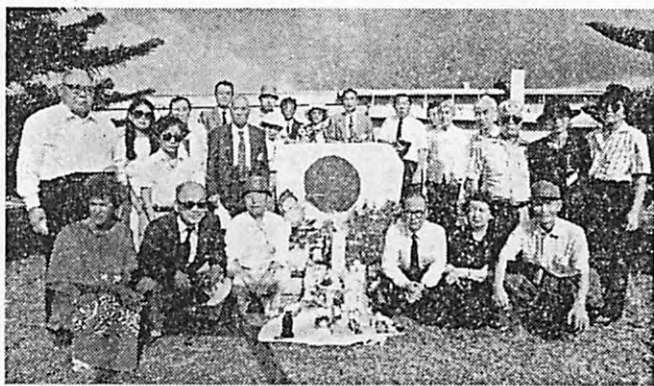
る。そして次に供花・お供物・父母兄弟の写真を海に手向けながら私は亡き兄に語りかけた。

待っていただろう。つらかっただろう。会いたかっただろう。そして亡き父母が兄の戦死の公報を受けた時、こんな知らせは信じられない、と言いなから泣きじゃくり嘆き悲しんだ様子を一節ごとに話した。兄はただ頷いて聞いていたが目には涙が一杯だった。私も涙で声もままならない。周りを見ると巡拝団員は皆んな涙々でくしゃくしゃの洋上慰霊巡拝だった。

③クエゼリン慰霊巡拝

マージナル航空の飛行機(18人乗り)によりマジュロから五〇〇軒離れたクエゼリン島環礁へ。眼下に環礁が見えてきた。一番大きな平坦な島がクエゼリン島だ。現在クエゼリン島はアメリカの軍事施設につき民間人の入島は厳しく制限されている。しかし我々巡拝団を迎えてくれた現地米軍基地の皆さんは極めて好意的だ。現地の日本人慰霊碑は島の西方に位置し、内海を背に建立されている。碑の下には六〇〇〇人の日本兵が眠っている。私の兄もこの中に眠る一人だ。团长さんを先頭に早速追悼式の準備にかかる。私は日本から持参した兄のお戒名・供物・父母の写真などを祭壇に上げて心からなる焼香をし兄に語りかけた。

唯ただお国の為と教え込まれていた時代とは言え、いや応なく戦場になり



クエゼリン島

出され、満足な食糧も得られない極限状態の中で、連日連夜敵からの砲爆撃を浴びつつよく我が陣地を守り通し、ついに力尽きて南冥の孤島で25才の若さで斃れていった兄林平さんの胸中察するに余りあり、声にもならず抱き合ったままに思えた。そして己れの生命の終焉を感じた瞬間に祖国の父母とどんな語り合いを夢の中に思い浮かべたことだろうと辛い問いかけもしてみた。兄は頷いてひと言こう応えた。『戦争は人間の生命を消耗品のように叩き壊す悲惨極まりないものだ』と…。

さて慰霊碑の周りはゴルフ場など基地内のレジャー施設となっており環境のよいところだ。私は約二〇〇m先の内海の砂浜に出て石片を拾った。長い間兄の遺品はお骨も・爪も、髪の毛の一片も無かった。今拾った兄林平さんの最期の地の石片を持帰り確かな遺品とする事にした。

四、おわりに

戦没した肉親の霊を慰め、平和への誓いを新たにするといい巡拝団の目的は十分に達せられ、満足感を覚えている。特筆すべきは戦没者の妻お三人の名残りを惜しむ焼香風景だった。現地日本人の山口さん・水谷さん・山村要さんには心温まる歓迎と追悼行事のスタンバイなどご高配を頂き感謝申し上げます。

マージナルは日本から約七〇〇〇軒、遠いようで近い。また来るぞ…心の中で叫びながら帰路についた。

鎮魂 クエゼリンの英霊

長塚 隆夫

おん身 イズコニ眠リタモウヤ

酷寒ノ北満ヨリわだつみの果テ「クエゼリン」ヘト転戦サル

海上機動隊第一旅団第二大隊ノ一員トシテ

おん身 クエゼリンノ浜ニ立チンハ昭和十九年一月十日ナリト

直チニ防備配置ニツク サレド珊瑚礁

ノ島ニ陣地ヲ構築スルハ抄ラズ作業半バニモ達セザルニ米軍早クモ一月三十日米攻セリ

意表ヲツカレタトアリ

おん身 緊張一瞬身構エテ枳然タルモノアラシ

翌三十一日敵機ニワカニ襲イカカリ米タレバ 米軍ノ上陸近キヲ知レリ

一三三〇 総指揮官秋山少将「敵艦ハ今夕ヨリ明未明ニ亘リ侵入上陸ヲ企図スベキヲ以テ海上部隊ハ全力ヲ襲撃スベシ」ト発令サル

翌二月一日早朝敵輸送船環礁ニ接近シ上陸ヲ試ミルモ我が軍コレニ烈シク抵抗スト

おん身 イズコニアリヤ コレヲ知りタルカ

おん身 枳然タレバ動揺スルコトアルコトナシ

二月二日 敵ハ支援艦隊ノ砲火ト航空攻撃ノ援護ニヨリ 〇六三〇 クエゼリン島西海岸ニ上陸セリト

秋山少将「各隊ハ一兵トナルマデ陣地ヲ固守シ増援部隊ノ到着マデ本島ヲ死守スベシ」ト

同日夜間 阿蘇大佐ハ全兵ヲ指揮シテ夜襲ヲ決行

米軍ヲ水際マデ撃退シタルモ物量攻撃ニ衆寡敵セズ セン方ナシ

二月三日彼我ノ激戦ツヅク

対戦車自爆体当タリアリ

日本刀ヲ振ツテ戦車ニカカリ壮烈ナル

機動群は、戦艦、重巡、駆逐艦および空母から成る「北方群」と、LST群、LCI群（手兵上陸用舟艇）その他の高速舟艇より成る「南方群」との二手に分かれて、ブラウン環礁に至る三二六哩の征途についた。

かくして、強大な戦力を装備した米攻路軍は、二月十八日、ブラウン環礁の北方に集結、攻撃態勢に入った。

一方、この強大な敵と相対さねばならなかった『海上機動第一旅団』主力は、ブラウン環礁最北端のエンチャビ島と、その遙か南方のメリレン、エニウエトク両島に分散布陣したが、中でも、米軍が唯一の飛行基地をもつ島と視認していたエンチャビ島が、必然的に攻略の主目標となった。

エンチャビ島守備隊（指揮官・海上機動第三大隊長・矢野俊雄大佐）の総兵力は、海軍第六十一警備隊分遣隊の四四名を含む七三六名であり、このほか航空部隊、軍属、設営隊員など合わせて一二七六名。主要装備は、重・軽機、擲弾筒など歩兵部隊固有の小火器のほかには、火焰放射機二、七五耗山砲二、二十耗機関砲二、十二糧海軍砲二、十三耗連装機銃二、五十耗迫撃砲一、八十一耗迫撃砲一、自動砲一、軽戦車三であった。

そのエンチャビ島では、一月三十日第七五三航空隊の陸攻九機がテニアンから到着、所在の陸攻と合わせて十数機となり、守備隊将兵の士気は大いに鼓舞された。だが、それは同日早朝クエゼリン、マロエラップ、ウオッセ、ミリなどマーシャルのわが最新線基地に対して米機動部隊が行なった大規模な奇襲攻撃（既述）に対応して、急遽索敵攻撃に当たるとともに、ブラウン来襲にも備えるためのものであった。防衛戦力が逐次強化されつつあると安堵した彼らの思い込みは、翌朝早くも無惨に打ち砕かれていく。

一月三十一日午前四時、いきなり戦爆連合二〇機が主目標のエンチャビ島に襲いかかり、同島はたちまち爆煙に覆われ、火柱を上げた。

ブラウン初空襲は、シャーマン高速空母隊によって開始され、戦闘機は黎明前にエンチャビ島上空に待機して日本機の離陸に備え、爆撃隊は飛行場に爆弾と焼夷弾を投下した。夜が明けると、戦闘機は高度を下げて掃射を加え、飛行場に待機中の陸攻は索敵機を含めて一機残らず大破炎上し、辛うじて空中退避した陸攻四機も、そのまま行方不明となった。

シャーマン部隊は、二月一日から三日まで引き続き同島を襲撃し、四日からはギンダー空母群が代わって七日まで攻撃を続行、いったん掃蕩後十一日と十三日に再び米襲を繰り返した。

その間、米機はエンチャビ上空をわがもの顔に飛び回り、銃爆撃を浴びせ続けた。迎え撃つ友軍機もなければ、

対空火器もない。一方的な敵の空襲に島は無力そのものだった。米機が去ったあと、多数の死傷者によって兵力はほぼ半減していた。それも爆弾や機銃掃射によるより、倒木や構造物の倒壊など間接的な原因によるものが多かった。コンクリート地下壕、戦闘指揮所を除いては、地上に露出している防禦施設のほとんどが破壊されていた。

未曾有の集中砲火浴びる

二月十八日は曇天に明け、風波が高かった。

ヒル提督の機動軍は、予定どおりブラウン環礁に迫っていた。しかし、米軍がこの環礁最北端のエンチャビ島を攻略するには、同島の風上側の外周にある磯波を突破する危険を冒すならともかく、そうでない限りは、礁湖側から攻撃するしか道はなかった。

その場合、進攻路は二つあった。一つは、最南端の南水道（広水路）から進入するものだが、途中一面に暗礁が存在する。もう一つ、メリレン島とジャブタン島との間の東水道（深い水路）を進攻路とすれば、触雷の危険を予期せねばならないことが、鹵獲した軍機海図で明らかになっていた。

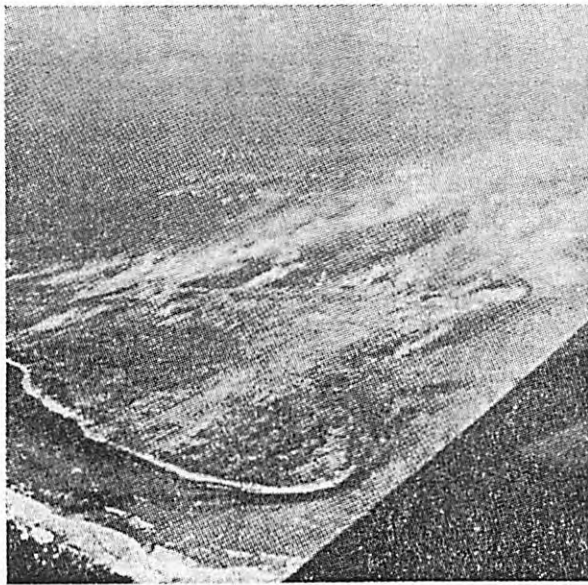
午前四時、掃海部隊が二つの水路を掃海、深い水路に障害物はなく、（広水路）の内側で二八個の繫留機雷が発見された。ミクロネシアで米国海

軍が遭遇した初めての機雷原である。掃海二時間後、（深い水路）を通じて吃水の浅い「南方群」の進入がまず開始され、九時一五分には戦艦テネシーを先頭に「北方群」が同水路を経て礁湖に突進した。その間、四十耗砲の側射によってメリレンおよびジャブタン島を砲撃したが、わが方の応戦は皆無であった。

モリソン戦史によれば――

日本軍は、メリレン、エニウエトク両島に守備隊が配備されていないように装い、米軍を欺いた。攻路開始に先立ち空母機がしばしば写真偵察を行ない、太平洋艦隊の写真判読班が鋭い検射を加え、またヒル艦隊がメリレン島に手の届くほど近距離にある水路を通るとき周密な視察を行なったにもかかわらず、敵は兵と兵器とを巧みに隠蔽した。また巡洋艦、駆逐艦部隊がエニウエトク島および（深い水路）をはさむ島に準備砲撃を加えたが、全く反応がなかった。南部の敵は「知らぬ振り」を装った。後日の捕虜の証言により判明したのであるが、同島の指揮官が部下に命じて、米軍が水路に入るまでは如何なる理由があっても日本軍の存在を暴露してはならぬと厳達していた。敵が無人を装うことにより何を期待したかは、明白でない。敵守備隊長は恐らくは、米艦隊がエンチャビ島占領に満足して撤退するのを待ったためか、あるいは無敵艦隊（東條宣伝の空文句）が現われて礁島を奪還するのを待ったためであったらしい。

午前九時半頃、ついに米艦艇はエンチャビの内海正面約一〇軒に姿を現わした。



エンチャビ島をめざして突進する米海兵隊の上陸用舟艇群 (正面左上)

わづか五〇〇名弱
名を失い、兵力は
はさらに約二〇〇
撃により、守備隊
守備隊主力は、
滑走路付近で頑強に抵抗を試みたが、

一〇榴榴砲の
弾着は正確だっ
た。この日の砲爆
撃により、守備隊
守備隊主力は、
滑走路付近で頑強に抵抗を試みたが、

上陸前の、周到にして想像を絶する
「集中砲火」で叩きのめされたエンチ

一〇時三四分、ヒル部隊のすべての
進入が終わり、一二時三〇分指定錨地
に到着。その四五分後には、テネシー
およびペンシルバニアからの一四吋砲
弾がエンチャビ島上に炸裂して、猛威
をふるった。
しかし、米軍の艦砲は弾道が低伸し
ているため、平らな島を通り越して外
海の水面に巨大な水柱をあげることが
多かったため、守備隊はこの砲撃の合
間を縫って、外海側に配備した山砲な
どを内海側に移動させ、陣地の補修、
増強を実施した。
一三時三三分、上陸準備のため偵察
中隊が海上トラック三隻に分乗してル
ジョール島に無抵抗で上陸、次いで他
の偵察中隊がカメラリア島へ上陸した。

続いて、第二独立山砲大隊が七五耗速
射砲一二門をカメラリア島に、第一〇四
野戦砲兵大隊は一〇五耗加農砲一二門
をルジョール島にそれぞれ揚陸、日没
前に全砲の登録を完了。また第四戦車
大隊の一個中隊が、守備隊の万一の脱
出に備えてエンチャビ島西方二キロに
あるボコン島を占領、両翼からエンチ
ャビ守備隊にその砲口を向けた。
その間にも、猛烈な上陸準備攻撃が
ギンダーのサラトガ群戦隊および護衛
空母三隻の空母機によって続行され、
艦砲もまた、上陸に先立って少なくと
も二八〇〇屯の弾丸をエンチャビ島に
撃ち込んだ。
海岸線の主力陣地は、完膚なきまで
に爆撃で破壊され、守備隊は暗夜を利
用して防禦配備に
ついたが、日中の
空からの制圧に続
き、夜に入っても
艦砲と左右の島に
上陸した砲兵隊の
集中砲火が、エン
チャビ島に吹き荒
れた。

に激滅した。
ともかく、巨大遠征軍のマーシャル
作戦中、エンチャビ攻撃に参加した機
数は最大であり、投下爆撃もまた最大
であった。
米軍が一九四四年(昭和十九年)中に上
陸作戦で占領した諸島中、上陸前にエン
チャビ島ほど激しく粉砕されたものは無
かった(モリソン戦史)
二月十九日は、強い驟雨で明け、
間もなく強い貿易風に吹き払われた。
午前三時、米攻略部隊の艦砲および
島上の砲兵が再び一斉に火蓋を切り、
最後の二〇分間は航空攻撃に変わっ
た。この攻撃に衔接して、米海兵第二
二連隊(二コ大隊)総勢三五〇〇名が海
上トラック二〇隻に分乗、水陸両用戦
車一七隻がその周囲を掩護し、クエゼ
リン作戦で威力を発揮した砲艇六隻が
これを先導しつつ、エンチャビ島の礁
湖側海辺に殺到——その直前の緊迫
した戦況は、米軍による「空撮」が鮮
烈にそれを捉えている。
来敵正面に布陣した守備隊主力は、
健気にもわずかに残った擲弾筒と軽機
で激しく対舟艇攻撃を行ない、たった
一門残った迫撃砲も主力後方から連続
砲撃を加えたが、間もなく米海兵隊は
全軍の上陸を完了した。

彼我戦力の懸隔は余りに著しく、米軍
上陸の約一時間後には「突撃ラッパ」
とともに全員最後の突撃を敢行した。
七時三〇分頃には、米軍戦車数台が
すでに全島を蹂躪し、守備隊はもはや
組織的戦闘力を失っていた。その後は
米軍戦線に潜入したり、隠蔽された横
穴や銃眼のある塹壕から個々の抵抗を
続けるだけであった。
二月十九日午後一時四〇分、海兵隊
指揮のワトソン准将は、エンチャビ島
の占領を宣言した。
米海兵隊公刊戦史によれば(以下
同)、日本側の戦死者(米軍による死
体埋葬数)は約九三〇名、海兵隊は戦
死八五名、負傷一六六名であった。
——また、この時期、エンチャビ島
には多量のセメント、トタン、木材な
どの建設資材や、旅団の到着後三隻の
輸送船から揚陸された築城材料があっ
たが、各島への配分以前に米軍の来襲
を受けて、すべては烏有に帰した。
上陸後五〜六週間しかなかったため永久
防禦施設の完了したものは僅少であつた
が、大量の建設資材をもっていた点から
みて、防禦工事を大々的に進める計画の
あったことは明らかである。大口径高射
砲三門、二〇耗二重目的砲二八門が襲撃
直前にエンチャビ島に到着した。
ニミッツ長官は、攻略の好機を掴んだも
のと見える。かりに攻略時機が一週間遅
れていたとすれば、米軍の被害は遙かに
甚大であつたらう(モリソン戦史)

ヤビ島は、まさにアツという間に壊滅したが、事前の航空攻撃、艦砲射撃がきわめて軽微であった。エニウエトク、メリレン両島では、守備隊はほとんど無残で温存されていた。

すでにみたように米側は最初、両島には守備隊が存在しないか、ないしはごく少数の兵力が配備されているに過ぎないと判断していたが、米情報将校がエンチャビ島で発見した文書の翻訳によって初めて、両島がそれぞれ八〇八名、一三四七名の守備隊将兵によって防備されていることを知り、当初の無抵抗上陸計画を急遽改め、投入可能な兵力をもって逐次これを攻略する戦法に切り換えた。

エニウエトク島は、いわゆる棍棒状を呈する長さ四・二軒、幅は西端で二二〇米、北に行くにつれて細くなる全島珊瑚砂の島で、島一帯に密林と下草が生い茂り、高さ約六米の高地（マールシャル群島では山である）があった。

日本軍守備隊の存在が判明するや、米攻略軍は陸軍第一〇守歩兵連隊（二コ大隊）の投入を決定し、直ちに航空攻撃と艦砲射撃を開始した。その攻撃で同島に集積された弾薬は次々に誘爆し、食糧・兵器の大半を爆破、人員の被害も約二〇〇名に達したが、エンチャビ島の場合に比べると、その威力には格段の開きがあった。

米上陸部隊の第一波は、準備砲爆撃のあと、二月二十日六時十八分海岸に

達し、後続部隊も続いて上陸した。わが方は、海岸線でおずかの抵抗を試みたに過ぎなかったが、上陸した第一〇六歩兵連隊の行動が緩慢（歩兵部隊と海兵隊とは戦法が異なった）で

海辺は、混乱をきわめた。九時三〇分頃ようやく島を縦断する道路の線を突破して南方に進出したが、わが方は至るところに拠点を占拠し、迫撃砲や小火器で米軍の進撃を悩ました。

そのため攻略軍は、さらに予備隊である海兵一〇大隊を上陸させ、南進攻撃中である歩兵一〇大隊の東側（外海側）に投入したため、十二時五十分頃日本軍陣地はついに突破された。夜間も米軍の攻撃は続行され、翌二十一日早朝には守備隊將兵約四〇名が海兵大隊の戦闘指揮所を急襲したが、間もなく撃退された。だが、この戦闘で海兵隊も、大隊作戦係將校ほか一〇名が戦死した。

かくして、南部地区の日本軍陣地は二十二日に全滅。一方、北に向かった歩兵一〇連隊によって次第に島の北端に押し込められた守備隊は、二十一日午後、約五〇名が最後の斬り込みを敢行した。この攻撃は撃退したものの、米歩兵部隊の行動はなお緩慢であり、二十二日になってようやく北部地区の掃討を完了した。

二十二日一三時三〇分、陸軍のハーリー・ヒル提督は、エニウエトク島の占領を宣言した。わが方の戦死者（同

前）は約七〇〇名、米軍側の戦死三七名、負傷九四名であった。——遠征軍は、エニウエトク島でも、メリレン島の詳細な防禦計画資料を入手した。

二十一日、海兵隊は深い水路を隔ててメリレン島の対岸にあるジャブタン島に砲兵を揚陸、七五耗速射砲を据え、同日午後六時から上陸開始まで同島への砲撃を継続する一方、三日間夜連続の攻撃を強行した。

二十三日黎明、最後の砲爆撃の後、攻略部隊（エンチャビ攻略の海兵第二連隊）が六時八分、メリレン島への上陸を開始した。同島守備隊は、地下に構築した蜘蛛の巣状の堅固な陣地によって勇敢に奮戦したが、海兵隊は戦車を先頭に押し立て、その直後に爆破隊と火焰放射器隊を続行させて日本軍陣地を爆破し、焼き払った。

わが方は速射砲と地雷をもってこれに対抗したが、米軍戦車と海兵隊は一〇時三〇分島の北端部に達し、南部も一六時三〇分までに制圧された。

二月二十三日、ワトソン將軍はメリレン島の占領を宣言したが、その後も地下壕に残存する日本兵を掃討するため、エニウエトク島攻略時の約二倍の死傷者を出した。わが方の戦死者（同前）は約一〇三〇名、海兵隊は戦死七三名、負傷二六一名であった。

——かくして、巨大な米遠征軍が強行した一連の「マーシャル作戦」は、終わった。

洋上離島に対する攻略作戦のパターンは、ギルバート島の苦い経験を踏まえて立案したクゼリン戦でその基礎ができ、さらにこれを改善してエニウエトク戦に臨み、ほぼ定石化した。エニウエトク（ブラウンの米軍側呼称）の失陥は、日本海軍の敗北を決定的に表面化したというべきである。（モリソン戦史）

そして米軍が、このブラウン環礁の占領をいかに重視したか——、UP通信社の特派員リチャード・ジョンストンは『日本の太平洋支配は終わった』と題するレポートの中で、次のように述べている。

私はいま、エニウエトクとクゼリンから掃蕩したばかりだが、海上を飛行中、米軍に確保されたこれらの島々には頻繁な船舶の往来がはじまりかけていた。マーシャル群島の要塞は、日本に対する新たな打撃を準備しつつある。エニウエトク環礁はすでに支那大陸の沿岸に向った弓であり、この陸上基地から飛び立つリベレーター爆撃機が炸裂する石火矢となつて、日本軍のアジア大陸防衛の最後の線であるトラック島、マリアナ群島に向かって放たれるのだ。過去五週間の間に、日本の太平洋支配は終焉を告げ、われわれがその支配権を握るに至った。エニウエトクの占領とともに、われわれは北はアッツから南はニューブリテン、ブーゲンビルに延びる空軍の鉄線をもって日本帝国を包囲し、トラックをして日本艦隊の主要基地としての使用を不可能ならしめたのである。

（次号完結）

(8 頁より)

戦死ヲトゲタルアリ

二月四日 イチジルシク破壊サル

一〇〇〇 全員死ヲ決シ 自決ノ銃声

ヲキキナガラ正面ノ敵ニ突撃シ 阿蘇

大佐モ壮烈ナ戦死ヲトゲタリト

二月五日 一二〇〇 米軍ハツイニ島

ノ北端ニ達シ宣言シタリ「クエゼリン

ノ組織的抵抗ハ完レリ」ト公刊戦史ハ

記ス

おん身等 ツイニ果テタルカ

故郷ヲ思イタルヤ

父母弟妹ヲ思イウカベシヤ

おん身寂然タレドモ 敵ニ対シ全身碎

ケルノミ タダニ戦ハ難カリキ

全身全霊ヲ捧ゲタルハ尊キキワミ

おん身眠リタモウハクエゼリン

我今、クエゼリンノ礁砂ヲフミテ立ツ

おん身ノ近キニアリ 涙ノゴワズ

タダ御霊ヤスラカニ

……菩提薩婆訶般若心經

夫を失いたる妻の

父を亡くしたる子の

兄を 失いたる弟妹の

皆思い同じくクエゼリンに詣でたり

椰子の葉蔭を吹き抜ける礁湖の風に身

をさらし

絶え間なき波の音に心まろび

夜は南十字星を仰いで

夫を 父を 兄弟を偲びぬ

この地クエゼリンを訪れ

御霊鎮もりたまえ
平成四年三月二十九日
巨いなる靖国の鳥居を仰ぎきざはしを
昇る
この日慰霊に集いたるは全国より百九
十六名
神官の御饌御酒を捧げたるを身近に我
ら御霊の近きにありと心願いぬ
祭詞に首深くたれ
祭文をかみしめるは御霊に捧げる一同
の心一つなるを刻みぬ
我ら平和に生きん
御霊尊し 安らげくあれ
(假名遣い現代表記)

父の戦歿地を訪ねて

石川 勲

私の父石川政雄は、八海山丸の乗組
員として活動中、昭和十七年十月二十
二日、ギルバート諸島(現キリバス共
和国)の南緯四度、東経百七十五度に
於いて敵駆逐艦と交戦、船と運命を共
にした。私が五歳の時のことである。

何時の日か父の戦死した国を訪ねた
いと思っていたが、五十年目の今年、
漸く永年の念願が叶えられた。私共家
族四名と旅行社の添乗員一名は六月十
七日成田を出発して、ホノルル、マジ
ュロを経由し、現地タラワ島には二十
二日に到着した。第一印象は唯々暑い
国だと思うのみであった。
すぐベシオ島に赴き、メモリアルパ
ーク(慰霊公園)の「南瀛之碑」にマ



タラワ島 南瀛之碑

ーシャル方面遺族会からお預りした生
花と靖国神社の御神酒を供え、異境に
眠る英霊の御冥福をお祈りした。

近くにある赤く錆びた大砲や高射砲
そして無数の弾痕露わな司令部跡やト
ーチカなど、当時のままの遺物を見る
と胸を締めつけられる思いがした。

慰霊公園は綺麗に清掃されており、
慰霊碑も周囲のフェンスも、汚れ、破
損などは見受けられなかった。

今回は、キリバス共和国を訪ねるこ
とが目的であったが、次回には父の船
の沈んでいる海を訪ねることを我が心
に誓い、マジュロ、グアムを経由して
六月二十六日無事成田に帰った。

今回の現地訪問に際し、遺族会の佐
藤会長と、会員の中村久さんからいろ
いろと親切な助言をいただいたのは誠
にありがたいことでした。

佐世保・釜基地の戦後なき英霊

内海 淑子

私の母は先の大戦で弟を二人失って
います。叔父(登)はクエゼリン島で
戦死しました。幸いにも登叔父の方は
マーシャル方面遺族会で毎年慰霊祭が
盛大に行われており感謝しております。

しかしもう一人の弟、フィリップ
のマニラで戦死した叔父(栄)の方は
慰霊祭も、遺族会も無いので戦死公報
の日、三月十六日に靖国神社に参拝し
ておりました。ところが平成元年一月
テレビ長崎から戦後秘話として次の様
な事が放映されました。

戦後の昭和二十四年一月フィリッ
プのマニラから日本軍人・軍属・民間
人の遺体・遺骨約五千柱をアメリカ軍
より遺族に返還するようにと日本政府
に引渡され、佐世保市、浦頭(うらが
しら)引揚港に戻って参りました。

引揚船(ほこた丸)に乗せられてい
た遺体はフィリップ島の墓地などに仮
埋葬されていたものを掘り起こし、大
半の遺体には名前、階級、部隊名など
を記した札が添えられ、それとは別に
ローマ字の名簿も添えられこれにも氏
名、大隊、部隊、階級、戦没地、死亡
年月日が記されておりましたが無名
(アン・ノン)と書かれた遺骨も多数
ありました。

国民自重の精神(二)

小泉 信三

(註) 栄光の記念艦三笠は、敗戦の後遺症で見ても無残に荒れ果てたが、内外の有識者の呼びかけで、復元保存の気運が高まってきた。

本稿は昭和三十三年十一月四日、日本工業倶楽部で開かれた三笠保存会発起人総会の際の記念講演の要旨です。

東郷司令長官の徹底的なる作戦計画またはその猛烈きわまる訓練というよきなことについては、国民は知りませんから、ただ日々待ちたくないバルチック艦隊の近づくのを待つという気持であった。もしもこの艦隊の全部でなくとも主力がウラジオストックに入港することに成功したならばどうなるかさらにも、万一にもわが艦隊が撃破されたならばどうなるのか、満州におけるわが大軍はどうなるのか。朝鮮の向背はどうなるのか。私どもはまた十七、八の少年でありましたけれども、それらのことに考え及べば心配があとから出てきました。日々が不安で、日々が苦しかったというのを思い出します。そのあとに日本海海戦の勝利が報ぜられたのであります。

いかにそれが国民に喜びというか、救われたという感じを与えたことは今

日もなおはっきり思い出すことが出来ます。そうして撃滅という言葉が使われておりますが、真に撃滅であつて、ほとんど完全なる勝利、伊藤正徳君は野球が好きで、野球の完全試合というものをもってきて、相手に一つのヒットもなく、もちろん一点も入らない、出塁する者は一人もないという試合を完全試合と言うそうですが、海戦の上で古来完全試合というものはただ一つしかない。これがそれだということを書いておられますが、よくわかる話であります。

もちろん兵は凶器でありまして私は決して戦争における人命や物財の破壊を語って楽しむべきではありません。しかしながら、この地球上に国を立てておる一つの国民が国の危うきに臨んでその祖先のものでもあり、子孫のものでもある国土とその独立を守るために心身の力を尽し、そしてこのような大勝を博してそして自国の安泰を勝ち得た、国を存亡の危機において守り得たということはこれは忘れてはならぬと思ひます。それはその国民がいかなる国民であるかを示すものであり、その時代に生きた者はこれを後世に語り

伝える義務を担うと思ひます。もとよりわれわれはわが連合艦隊に対して、言葉で表わし得ないほどの感謝を感じましたけれども、しかし、わが連合艦隊は外から日本に与えられたものでなくして、われわれ日本人が産んだものである。連合艦隊の成功と光栄はすれども、今日こういふことを少し説いていいのではないか。さらにまた、この世界の歴史の上から見れば、日露戦争、ことに日本海海戦の圧倒的勝利ということが世界の歴史を動かしておると思ひます。

日本の国を開いてから今日までの百年の初めと終りとを比較してみますと、そこに一つの逆の流れが流れておる。百年前には西欧強国の力が西から東に及んで、ついに日本に達したのであります。今日ではアジア全体において東から西へ向つての一種の押戻し運動が行われておる。それはアンチ、コロシアムとかあるいはアジア国民主義という名前と呼ばれておりますが、とにかく百年前とは違った潮流が流れておる。

この転換の原因は何かといへば、結局アジア人の覚醒といふことであります。ところが、この覚醒を促したものの数多くあるうちの日本の近代化と日本の勃興、ことにその端的に現われましたものは、日露戦争における日本海海戦

の勝利であつたと言つていいのではありませんか。そうしてみれば、日本海海戦、また、そのときの旗艦の三笠というものは、単に日本人にとって忘れてはならないものであるばかりでなく、世界の歴史を促す一つのファクターになつておる。それほどに三笠がどういふ現状にあるのかということに思い及びますと私どもは実に堪えがたい気持がしたのであります。日本人として赤面するのみならず、日本を愛する外国人が赤面するであろうということで、また赤面するというような気持を抱いて今日に至つたのであります。幸いにしてこの会ができて今日ここに発足するということになりましたので、私どもは急に明るくなつたように感じます。

今日までは別々に同じ愛いを持つ、同じ気持を持つ人同志が個別的に話しておつた、語り合つておつたのであります。ところが、こうやって一堂に会してみれば、愛いと同じくする人がいかに多いか。さらにまた、このホールの外にどれだけ同感の人があるか。三笠の現状のままですべて恥かしくないといふものはそれは自由であつて、恥かしくないものは恥ぢないでもよろしい。しかし、それを恥じる者は力をあわせて三笠の復元のために働くべきではないか。はなはだ不揃いな不調法なお話であります。私の講演はこれをもって終りたいと思ひます。(完)

杳き雲の下で (二)

『戦いの記録』

会友 平林 和夫

マロエラップへ転進

ルオットに着いた頃は未だルオットは内地と同じだった。一度も敵の空襲を受ける事がなかったからである。二五二空が、このルオットに転進を令された一つの目的は、南方前線ババウルでの兵器、軍需品の消耗を補給し搭乗員や兵員を補充して、教育訓練と航空戦力の再建整備を急ぐ事にあつたと思われた。この目的の為に活発な行動を立てが展げられた。主計科としてはむしろ任務増大となり繁忙を極めていたのである。

ルオット島でのひと時の平和は、やがて次の島への転進の令があつて短い期間で破られる事になった。即ち我が第二五二海軍航空隊は十八年十一月一日、同じマーシャル方面の環礁マロエラップ島に転進する事になった。本隊は輸送船二隻で数重な警戒をしながら前進した。私は主計科として分隊長と共に小さな方の船、巴蘭丸に乗っていた。

マロエラップ初空襲

十一月、同島に着いて、それぞれの宿舎、兵舎に入り事務室や酒保の整備開店となった途端、初空襲があつた。それ迄ルオットにいた時は一度も直接頭の上に敵の空襲を受ける事はなかつたのである。それがマロエラップに来た途端に然も、この島としても初の空襲を受ける事になったのである。

「成る程、前線に出たな」
等と話し合ったものであつた。ところが、それから忽ちの内に、この方面は戦局愈急を告げる事になった。

十一月二十一日、米軍の強烈な反攻がタラワ、マキンに向けられ、二十五日両島のが軍は玉砕した。十一月二十日から附近で彼我の壮絶な空中戦があり、わが方善戦したもの戦力の消耗甚しく前途暗澹たるものがあつた。

カントン、フナフチ、ナムメア等から発つ敵機は、距離の遠い事からホンの二、三日置きに少数機で来ては少しの爆弾を落として行くのが限度であつた。始めの頃は、その程度の空襲ぶりであつたのだ。敵の機種は航続力の長い中型機であり主としてB-25か、ノースアメリカンが一機〜三機ようやく島の上空に侵入して、高度から爆弾を落として早々に立ち去ろうとするのが常であつた。所在の我が航空戦隊、特に我が二五二空は敵の呼び声高い「ゼロファイター」であつて当時世界最優秀の戦闘機として、その技術と共に性能ぶりを誇っていた。応戦して、その都度、少なからぬ戦果を上げ続け

た。海上に浮く敵の墜落機からの捕虜を救つた事もあつた。日が経つにつれて、二、三日置きに来ていた敵機は次第に間隔をつめて、回数が多くなつて来た。毎日のように来襲するようになり次には日に数回も、そして次には護衛の戦闘機がついて来るようになった。戦爆連合なのである。更に夜間爆撃も加わるようになって来た。

玉砕を覚悟して

この島に対する敵の攻撃は明らかに集中増加された。夜間爆撃も一夜に数度に亘る夜が出て来た。執拗に不規則に、一機、一機が一弾投じては、サット退き、又、回つて来ては投弾した。神経戦を明らかに加味していた。当時、我が方は未だ「夜戦」(夜間戦闘機)は来ていなかった。夜間戦闘機とは電波探知機によって敵機を捕捉し感應する波状電波によって、その位置を探知し夜間、目に見えない敵機と空戦する戦闘機である。「夜戦」がないから夜は敵機への応戦をしない。探照灯も三基あつたが位置が敵に察知されるのを慮つて照射されなかつた。言わば無抵抗の状態に灯火管制をしたままで島はヒソリとしていただけであつた。一月二十九日の夜も敵は投弾せず十分、二十分置きに島の上空に入った。その都度、警報が出されて、その度に我々は防空壕に入った。

「こんなに、しばしば来るのは、おかしい」とは思ったが、それ程に気にか

最後の整理

「古い軍機書類は早目に今日、焼いておこう。」私はそう考えて砲爆撃が小止みになったら壕を出ようと考えていた。その時、本部から伝令が来た。芝田と言う補充応召兵でこの島に来たばかりであつたが、年齢もつんでおり苦労者らしく沈着で、そつがなくて信頼が厚く、本部付きになつていたのである。この弾の中を良く来れたと思つた。私は鉄兜をかぶつて一緒に当直室に駆け付けた。障害物がやたら多くて思うように走れず気が焦つた。当直室には軍医長宮崎軍医少佐(後戦死)、赤塚軍医大尉、藤井軍医中尉(後戦死)、水元大尉等が集つていた。「情況知らせ」。「敵がルオットに上陸したようです。」本部と当直室とが電話伝令をやつてゐる。直通の電話線が破壊されてゐるので迂回して連絡してゐるのである。私はルオット上陸を予期はしていたが、それが確実となると改めて覚悟をした。というよりも三ヶ月前迄はその島に居たのであるから、その島で今、展開されているのであろう激しい上陸阻止戦を想像して戦友の上に思いを致すと共に、この島でも、それが近く繰り広げられるのであろう事を痛切に思つた。

名 簿 訂 正

◎ 平成 3 年 8 月 15 日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏 名>	<訂 正 事 項>
21	秋 山 正 之	〒066 千歳市末広 7-8-15-405 TEL0123-26-4226 神奈川より転居
21	田 畑 武 雄	〒065 札幌市東区北38条東18-3-3 TEL011-782-2159 続柄弟 千葉県野沢きくえより変更
22	峯 木 作	TEL 0144-72-6322 を加入
26	大 場 美津子	会員名美津子を広弥に妻を長男に住所の一部字中道を字上中道に TEL0234-28-2787に訂正
31	櫻 井 か ね	住所熊谷市銀座 4-717 に変更
31	中 根 杉 子	住所番地 1552-2 を 1555-2 に訂正
32	石 川 き み	〒260 千葉市中央区大巖寺450 TEL043-263-3676 戦歿年月日を 20.2.20 に変更
32	金 崎 史	所属部隊に盤谷丸、戦歿年月日に 18.5.20 を加入
33	浄 永 幸	〒264 千葉市若葉区千城台東1-2-1-203 秋元康夫方 TEL043-237-8637 戦歿地クェゼリンをエビゼに訂正
33	田 中 雄 吉	〒260 に訂正 千葉市の後へ中央区を加入
34	宮 本 豊 吉	住所千葉市中央区蘇我町 2-1071 TEL043-263-2226 に変更
34	米 田 正 子	〒260 千葉市中央区星久喜町1213 TEL043-263-0520 に変更
35	会 田 く に	住所南千住 8-10-1-1105 に変更 所属部隊ウ66ウ64 戦歿年月日19.11.29 を加入
35	青 木 利 一	住所日の出町大久保を大久野に訂正
35	石 川 勲	〒152 目黒区中根 2-17-24 TEL3718-5147 戦歿者石川政雄、続柄長男、所属部隊八海山丸 戦歿年月日 17.10.22 戦歿地ギルバート沖<新入会>
36	加 藤 照	〒157 世田谷区北烏山 2-3-9-303 TEL03-3309-0188 戦歿者常見登、続柄妹、所属部隊3136 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
36	小 林 法 子	住所下浦方を加入
37	菅 沼 昇	住所〒156 世田谷区経堂 5-33-1 電建別館405 TEL03-5228-3904 に変更
38	鳥 居 ミサオ	〒169 に訂正 TEL03-3200-1506 を加入
39	長 岡 ふじえ	〒170 豊島区西巣鴨 3-7-10 TEL03-3917-9378 戦歿者長岡仙之丞、続柄妹、所属部隊芝補 戦歿年月日19.2.24 戦歿地ブラウン<新入会>
39	布 川 慶 一	〒176 練馬区練馬 4-31-19 TEL03-3992-6005 戦歿者青池辰市、続柄弟、所属部隊陸軍 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
40	昼 間 楽 平	世田谷を世田谷区に訂正
41	渡 辺 妙 子	TEL03-3997-7467 に変更
41	赤 城 とみ子	戦歿年月日 19.7.18 を加入
43	斉 藤 静 子	〒211 川崎市幸区南加瀬 3-25-9 TEL044-588-3003 戦歿者工藤幸光、続柄妹、戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
44	長 塚 隆 夫	〒215 川崎市麻生区岡上572 TEL044-988-5043 戦歿者長塚新、続柄弟、所属部隊海上機動隊 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
45	松 江 正 子	〒227 横浜市緑区みたけ台11-9 TEL045-973-3370 戦歿者常見登、続柄姪、所属部隊3136 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
45	安 威 孝 司	TEL045-892-5402 を加入
46	石 丸 進	続柄弟に訂正
46	小 林 正 道	住所の中楡原を楡原に訂正
50	青 木 みねを	TEL0776-37-1070 を加入
50	鳥 羽 春 枝	番地 39-13 に訂正
51	宮 入 貞 夫	番地 725 に訂正
52	山 田 八 重	住所の中元町を取消
53	木 野 政 雄	続柄弟を加入
54	山 本 藤 子	〒421-04 榛原郡榛原町勝岡63<新入会>
54	安 藤 昌 子	戦歿年月日 18.5.20 に訂正
54	大 森 才 次	春日井市宮町字長齊29 サンビポット春日井Ⅱ101号 田中方に変更、戦歿年月日19.12.19を加入
55	鈴 木 麗 子	〒441 豊橋市花中町122 TEL0532-32-0296 戦歿者野村信二、続柄長女、所属部隊755 空 戦歿年月日18.11.20 戦歿地タラワ<再入会>
55	浜 田 芳 枝	所属部隊 第 6 京丸を加入
55	小 寺 洋 子	所属部隊 軍属を加入

<頁>	<氏 名>	<訂 正 事 項>
55	望 月 靖 久	〒459 名古屋市緑区大高町字北南林4 TEL052-621-6094 戦死者望月英久、続柄兄、所属部隊不明、戦歿年月日17.2.1 戦歿地ギルバート<新入会>
56	高 津 久 雄	続柄を甥に訂正
57	松 宮 花 子	旭区千林2-4-3-501号室 田端昇方に変更
58	枝 光 剛 郎	所属部隊を6通に訂正
61	中 山 健 守	所属部隊 ナウル守備隊を加入
65	渡 部 守 常	所属部隊 6通に訂正
66	馬 場 常 常	〒781-11 土佐市本村432 TEL0888-55-0804 戦死者馬場正雄、続柄姉、所属部隊4気象 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
66	青 山 アヤ子	所属部隊 佐世保海軍特7陸戦隊を加入
67	鐘ヶ江 敬 介	TEL0944-86-5148 に変更
70	青 山 次 則	戦歿年月日 19.12.22 加入
71	土 田 利 子	〒862 熊本市帯山4-28-18 戦死者秋山門造、続柄長女、所属部隊6根司 戦歿年月日19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
72	桃 田 志津代	住所 130番地を追加
73	一 黒 キミヨ	TEL0993-39-1203 を加入
73	一 黒 キミエ	TEL0993-24-2864 に変更
74	東 島 キキク	戦歿地 クェゼリンに訂正
75	島 袋 ヒデ	TEL098-938-5988 に訂正、所属部隊 佐世保鎮守府第7分隊を加入
75	宮 城 幸 子	TEL098-877-3907 を加入
76	安 東 正 夫	備考南東方面艦隊を加入
76	江 藤 圭 一	TEL0823-38-8321 を加入
77	川 副 克 己	備考 65号駆潜艇に訂正
77	佐 藤 敬 吾	〒960-04 福島県伊達郡伊達町字鶴田4-6 TEL0245-83-5125<新入会>
77	高 瀬 吾 市	〒116 荒川区荒川4-11-2 西日暮里サマリヤマンション608号 TEL03-3891-1558 備考 横須賀鎮守府第六特別陸戦隊<新入会>
78	十 二 徳 次	〒251 藤沢市鶴沼海岸6-14-8 TEL0466-35-7775 に変更
78	馬 場 直 人	西唐津3-6420 TEL0955-73-3236 に訂正

佐久間フミ子(ポランティア)

典夫 高橋鎮夫 黒川 誠 佐竹エス 晝間楽平

高林芳夫 山下みつ 佐藤宗丕 佐藤ナヲ 石谷

ミ子 水野薫 長谷川智子 山森久江 内海淑子

清瀬 安室慶二 長塚隆夫 栗田千代子 小山キ

座談会参加者 伊藤ますの 近藤マスエ 藤田

た。(晝間楽平)

午前十時、石谷幹事の司会で話し合いが始まりました。参加者全員の自己紹介と、心に残る思い出、会に対する質問、要望や、これに対する回答など、次々と話題もかわり、昼食を共にしてなごやかな話し合いが続けられた。

境遇に多少の違いはあれ、同じ時に同じ島で肉親を失った者の思いは一つ、遠慮気兼ねのいらぬいホンネで物を言えるのはいいことです。数人から、故人が夢に現われた話が披露され、科学で説明できないことの多いことを知らされた。

戦死者の遺体を、戦死の場所に丁寧に埋葬された所、ブラウンのように跡かたもない所、日本に送り返されながら何故か正當な落着き場所に届けられない実例の話に、一同暫し暗然となった。

遺族だけで、会報や資料の発行のほか現地慰霊碑の建立などの意義深い仕事をされたことに感謝し、永く続けてほしい、又戦歿五十年の節目に際し、会としての行事を考えてほしいとの要望に対しては、会長から役員会で善処したいと回答された。

日時/平成四年四月十九日
場所/東京都勤労福祉会館

島別座談会シリーズ(第二回)

クエゼリン・エビゼ座談会



慰靈祭参列者芳名

(敬称略、順不同)

今年三月二十九日(日)の慰靈祭に
次の皆様が参列されました。参列して
も受付で手続きをしなかった方は掲載
されません。参列された方は一九六名
で、氏名のわからない方は十名です。

宮城県 伊勢 照男 伊勢 敏子
松木 孝子

秋田県 加藤 カヨ 近藤キクエ

山形県 長岡 仙一 長岡ふじゑ

福島県 坂本キヨ子 坂本 サダ

鈴木ヨシエ 富田 ミツ 富田 キミ

茨城県 安藤 啓次 安藤 やす

若狭 明光 若狭 幸男 若狭 久男

伊藤タツ子 小倉 洋子

栃木県 猪瀬 ナカ 高橋 克麿

埼玉五県 井沢 なを 小野 リエ

小野 博孝 北原ひで子 近藤マスエ

菅野 久雄 菅野つね子 野田 雅子

服部 陽一 藤田 清瀬 天野 好子

山下 みつ 柴田 貞子

千葉県 岩佐 とみ 川間 つね

浄永 孝 浄永 秀作 津久井艶子

芳賀タツエ 広原 チヨ 宮本 豊吉

谷沢 英子 米田 豊治

東京都 大給 湛子 青木 利一

荒木 常子 石谷 典夫 浮田 櫻代

遠藤 安男 大石 深 大石 美子

津久井尚人 津久井美佳 内海 静枝

内海 淑子 押谷 義雄 加藤 照

栗原 利雄 黒川 誠 黒川 直吉

小池 勇二 小林 法子 小山キミ子 田賀 英子 田賀 茜 田賀 護

佐竹 エス 佐藤 宗丕 佐藤 なを 田賀 伊藤ますの

斉藤耕太郎 斉藤 美美 斉藤 幸江 田賀 渡辺 三三

白井まさ子 白井 勝年 白井小夜子 田賀 三浦 久夫

白井 正恵 菅沼 昇 菅谷喜代子 三浦 たき 土屋まさ子

鈴木つな子 田中 猛 高橋 鎮夫 田賀 大森 すす 鈴木 麗子

高林 芳夫 滝 知道 滝 崇江 田賀 山下 治 山田 あき

佃 喜美 高瀬 吾市 中田 テル 田賀 伊藤 武

大野 清子 中村 久 中村 順子 田賀 中野フヂエ

長尾 静子 西沢 和子 西田 恒子 田賀 坂本ヤスエ

布川 慶一 番場 信子 豊間 樂平 田賀 山口 眞鍋 公代

豊間志津子 水野 貞二 水野 薫 田賀 高知 馬場 常 馬場 千草

望月とよ子 森田 喜代 加藤 ヨウ 田賀 福岡 鐘ヶ江敬介 鐘ヶ江悦子

井上 キチ 蓮尾 諭吉 長谷川智子 近藤 章 近藤 敏子 高橋 英子

柳沢 正雄 山口 裕子 山口 良二 高橋 健志

山森 久江 松江 正子 能勢 澄子 田賀 長崎 井上 義夫 川副 克己

神奈川 赤坂 スズ 渡辺キヨ子 前田 フサ

岩田とし子 内藤つる子 石渡 綾子 田賀 大分 吉良 正義

鯛尾 房江 片桐 温子 大石 岳男 田賀 宮崎 高橋 重美 山内 キク

大石 純一 大石アサ子 大石 ミカ 片山 計 田賀 鹿児島 村上 義博 村上 芳江

江坂 弘 斉藤 静子 穴戸献吉郎 杉田 絹恵 和田恵津子 谷 達也

吉田 操 佐藤 隆一 佐藤 章子 田賀 佐世保 引揚援助局が陸揚

佐藤加久也 長塚 隆夫 土屋 太郎 田賀 釜地区の広場に運び火葬にしな

西森サツキ 江村 源次 江村 貞彰 田賀 穴が掘られて埋められてしまいまし

新潟 江村 和子 賢一 澁谷セキノ 田賀 た。そうして書類上は全て処理済みと

江村 和子 藤田 ヨリ 藤田 正勝 山田 正三 田賀 なりこの地のことは知る人も無く荒れ

藤田 ヨリ 橋本 淑子 池田 眞美 田賀 果てて無縁墓地の形態もとどめぬ状態

米田 トシ 池田 淑子 池田 眞美 田賀 で放置されました。

富山 池田 淑子 池田 眞美 田賀 昭和三十七年福岡市在住のフリーラ

村梶 光栄 田賀 将一 田賀 朋子 田賀 イター小西龍造さんがたまたま訪れた

福井 田賀 将一 田賀 朋子 田賀

田賀 将一 田賀 朋子 田賀

田賀 将一 田賀 朋子 田賀

田賀 将一 田賀 朋子 田賀

(13頁より)

佐世保市でこの情報を耳にし、あちこちと車を走らせやうと草ぼうぼうのなかの釜墓地と小屋の様な本仏寺を見つけた。堂守りの芳林住職からうす汚れたローマ字の名簿を渡されました。

名簿があった、無縁仏ではなかったと小西さんはこれをカタカナに書換えると共に両手にズシリと重い名簿を手にとり遺族捜しを始めた。テレビ、新聞、資料展、などで遺族を捜してありますが、一日も早く無言で帰還した英霊たちを一人でも多く名簿の中から、息子を、夫を、兄弟を、見つけたら、私共母と共に小西さんを尋ねて、現地釜墓地に行きました。でも大勢の英霊が遺族に「ここに帰って居る探しに来てくれ」と必死に叫んで居るよう感じられました。

名簿は本仏寺にありますがこの事を詳しくお知らせしたい方は左記にご連絡ください。

今回佐世保市の会友、井上義夫様より遺族会会長を通じて沢山の資料を戴きました。

東京都港区白金三―十四―三
密〇三―三四四三―六五三四
内海 淑子

長崎県佐世保市江上町四〇九五
釜墓地 海老山本仏寺 岡村政敏
密〇九五六一五八―四二一一

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため
浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

- 北海道 黒沢 克己 峯 木作
- 青森県 池田 精治 工藤 ハナ
- 塚原 ハナ 伝福 ちゑ 菅井 光
- 本堂 テフ 山田 幹夫
- 岩手県 小杉 リサ 菅原 キイ
- 宮城県 新田富美子 平形いせこ
- 松木 孝子 山本 ちゑ
- 秋田県 奥山 キノ 熊谷サタヨ
- 小室舞司郎 近藤キクエ 佐藤 敏子
- 関山富一郎 相馬 ツキ 加藤 カヨ
- 山形県 丹野 アサ 赤塚 美正
- 福島県 富田 ミツ 吉津ミドリ
- 鈴木ヨシエ 坂本キヨ子 江間正二郎
- 茨城県 大熊 もと 神谷 和枝
- 倉橋 たみ 富田 保 堀江 誠一
- 若狭 明光
- 栃木県 猪瀬 ナカ 田名綱武夫
- 吉川 芳蔵 珍田 光子 日向野キク
- 群馬県 井沢 なを 宇田川ひさ
- 埼玉 北原ひで子 鯨井 久八
- 栗原 タネ 近藤マスエ 柴田 貞子
- 長谷部なを 福島 レイ 藤田 清瀬
- 山下 みつ 櫻井 かね 中根 杉子
- 小谷中せい
- 千葉県 相川 孝夫 石川 きみ
- 大石 タケ 金崎 史
- 川間 ツネ 櫻井 一正 浄永 孝
- 高山 貞男 津久井艶子 長沢 その
- 芳賀タツエ 広原 チヨ 宮本 豊吉
- 谷沢 英子 吉田ヤヨイ 豊谷美恵子
- 東京 飯島浩一老 石谷 トシ
- 五十嵐孝三 内海 静枝 遠藤 安男
- 岩浪きよ子 大島 か乃 河野 勇一
- 大石 潔 黒川 誠 小池 勇二
- 栗原 利雄 佐竹 エス 佐藤 宗丕
- 小山キミ子 齋藤耕太郎 菅沼 昇
- 菅谷きよ子 高橋 鎮夫 高林 芳夫
- 佃 喜美 鳥居ミサヲ 中田 テル
- 中村 久 西沢 和子 西田 恒子
- 沼山 正英 長谷川智子 番場 信子
- 昼間 楽平 間々田やす 水野 はな
- 柳沢 正雄 六軒つる子 青木 利一
- 中村 順子 蕪尾 諭吉 望月とよ子
- 三ツ木正次
- 神奈川 赤坂 スズ 伊沢 ヤス
- 石渡 綾子 岩瀬 トシ 岩田とし子
- 江坂 弘 遠藤 芳子 大石 純一
- 大石 岳男 金子 武晴 川名 茂子
- 佐藤 登志 澁谷 良雄 穴戸献吉郎
- 鈴木 リン 露木 千鶴 西森サツキ
- 平松 菊枝 三村ともよ 吉田 操
- 吉水 梅子 和田恵津子 柳田 国雄
- 新潟 青木 謹次 阿部 文吾
- 片桐 さき 後藤 末吉 小林 正道
- 佐藤 フジ 坂井 繁男 澁谷セキノ
- 高野 清 高林 セキ 藤田 ヨリ
- 松岡 イキ 山田 正三 米田 トシ
- 富山 池田 淑子 金山 深雪
- 小林 好子 棚橋 昭二 広島 富子
- 藤木 ハナ 本多喜久江 村梶 光栄
- 石川 林 庄三 吉光 澄子
- 福井 青木みねを 田賀 将一
- 塚田 民子 鳥羽 春枝 柳沢 清信
- 山梨 黒川 正文 中山 いよ
- 三井 精義
- 長野 伊藤 正人 伊藤ますの
- 牛山 光子 中村 能夫 宮入 貞夫
- 宮下 礼子 高見沢およう
- 岐阜 鳥本みさを 堀尾 藤吉
- 山田 八重 吉田 綾 渡辺 三三
- 静岡 飯田たつ子 市川 市郎
- 江藤ふみ子 大塚 かね 後藤 行雄
- 土屋まさ子 野崎 豊秋 畑 良平
- 服部くにゑ 松下 竜二 山田 登世
- 高橋かつ江
- 愛知 大森 すず 川村 正一
- 浜田 芳枝 山田 あき
- 三重 近沢 あき
- 滋賀 正野 きぬ 川本 彦次
- 京都 大町 末子 川本 修
- 小林 卓也 谷 正文 中川 修
- 村上 増枝
- 大阪 中野フヂエ 馬場富美子
- 福田 音和
- 兵庫 枝光 剛郎 國見 嘉治
- 柴崎 晃 林 繁 山形 雅俊
- 山野イクエ 安福 道明
- 和歌山 柏木ふじ恵 福井 栄子
- 鳥取 門脇 一恵 杉川 及江
- 岡山 金子ミサヲ 中島 清子
- 広島 奥井 礼子 小林アヤ子
- 松本タカミ
- 山口 内富ミツヨ 坂本ヤスエ
- 徳島 坂本 栗
- 香川 上村コスギ 富田トシ子
- 愛媛 泉田 君子 久保田泰子
- 宅見 運保 松友 都 三好 邦博
- 森田 静子 渡部 守
- 高知 五百蔵国尋 河野 里美
- 小松千代美 田中 百合 野島 貞人
- 馬場 常 山本 誠章
- 福岡 青山アヤ子 一瀬クモエ
- 河村 未義 近藤シズエ 榎木孝二郎
- 西原 康雄 秦 サカエ 家迫 ソヲ
- 吉松 貞子
- 佐賀 金子 茂 中山 正敏
- 宮崎 ッヨ 山田 雪子 林 文枝
- 長崎 板浦 重雄
- 前田フサ 山下 タエ
- 熊本 植川 二男 植田 静夫
- 江口フジエ 北村 權蔵 塚野ヨシ子
- 右山 定 村上佳寿子
- 大分 石塚 文子 木村二三夫
- 宮崎 高橋 重美 友枝カオリ
- 森 フサエ 山内 キク 山口マサ子

山口 ミウ
 ◇鹿児島県 老山シヅエ 染川とめよ
 原田 惟行 村上 ノキ 山田フヂエ
 和田 芳久

◇沖縄県 座波 ツル 宮城 幸子
 ◇会友篤志会員等 足立 広信
 安東 正夫 井上 義夫 江村 源次
 押谷 義雄 香月 正紀 川副 克己
 吉良 正義 須藤 伝 高田源次郎
 土屋 太郎 豊谷 秀光 中島新之丞
 星川 武 松平 永芳

以上は平成三年十二月一日から本年五月三十一日まで、寄付された方々三〇〇名で、その合計金額は一、四三〇、三七八円でした。

五十五号二十頁の鹿児島県村山ノキは村上ノキに訂正します。

靖国神社の宮司が交替されました

本会篤志会員松平永芳様は、昭和五十三年以来靖国神社宮司として奉仕されておりましたが最適の後任者を得られ本年三月末日付で退任されました。後任には松平様の推挙に因り、四月一日付で熊本県神社庁庁長大野俊康様が就任されました。

松平様は、靖国神社が御創建以来最大の危機に直面した時期に神社守護の重責を担われ、神社百年の御安泰をはかるために整備十ヶ年計画を策定し、財政の改善、斎館、社務所の新築、遊就館の再興、御本殿昭和の大修築のほか

枚挙に暇のない程数々の業績を挙げられました。また、神社永遠の安泰のため靖国神社奉賛会を設立されたこと、就任直後に昭和殉難者の中の東條大将などの十四柱(占領軍の云うA級)を合祀されたこと、神霊を排除して神社の名称を残そうとした靖国神社法案に毅然として反対を表明されたことなどは余人にはできなかったことと思われまふ。靖国神社中興の祖と称される所以と存じます。(佐藤宗不)

会員のみなさまへ

峰岸 睦子

『環礁』56号で紹介頂きましたように、皆様始め多くの方々の御支援のお蔭で、タラワ島の合気道の道場は立派に完成し、毎日数十名の大人や子供達が熱心に楽しく稽古に励んでおります。稽古中はなるべく日本語を使い、数え方や挨拶も出来るようになりま

した。文字通り裸一つしかない生活の貧しさの中でも底ぬけに明るく素直な彼等に接していると自分の心が洗われる思いがいたします。

私は三年間の勤務を終えて五月に帰国しましたが、タラワの合気道の様子を見るため十一月初めに再びタラワに参ります。今後、合気道を通じて日本とキリバスの友好のかけ橋になりたいと念願しております。

今までは公務のため、島を訪れた遊族に満足なお世話ができませんでした

が、今後は自由がきますのでお役に立てると思えます。

写真やビデオをたくさん持ち帰りましたので、キリバスのことは何なりとお尋ね下さい。今年の十月末までは、〒160 東京都新宿区新宿七―二七―九

ホテル「ときわ」

電話 03―三三〇二―四三二一

に御連絡下さい。

タラワ墓参を希望する

会員、会友に急告!

今年十一月にタラワ墓参を希望される方は、八月二十日迄に本部宛に、電話、ファクシミリ又は、はがきでお知らせ下さい。希望者が十名以上あれば現地慰霊を企画し、御連絡下さった方にお知らせ致します。

本部だより

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」は同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身のまわりのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する率直な注文など何なりとお寄せ下さい。原稿は原則としてお返ししておりませんので、返却を要するものはその旨を書き添えて下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆会費完納のおねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納に御協力下さい。

今後は会費を納めない方は退会の申し入れがあったものとして、会員名簿から削除し、会報『環礁』の発送を中止します。御了承下さい。但し、特別の御事情のある方とは個別に御相談したいと思っておりますので、御遠慮なくお申出下さい。

☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報『環礁』をお届けしております。

この会のあることを知らない方が沢山居ります。お知り合いに本会をPRして下さい。マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦没者の親族ならば誰でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも年会費は二千元で入会金は要りません。

本部

〒103 東京都中央区日本橋人形町 一―八―二(泉商事ビル)
 マーシャル方面遺族会

電話 〇三―三六六一―八七六〇
 FAX 〇三―三六六一―六二四一